

『がちやん……きい』

(扉が開き、閉まる音)

扉の閉まる音が、部屋の中に重々しく響いた。

貴方とノラは、先ほどの路地裏から自分達の部屋へと戻ってきた所である。

ノラの親父であるという男は、貴方の拳が止まつたのが分かると這うよう、必死に路地裏から姿を消した。

追おうと思えば幾らでも追う事は出来たが、憔悴（しようすい）し唇を噛み締め、涙で顔を汚したノラの姿がそれをさせてくれなかつた。

いつもならば、家庭的な料理の香りと、不羨（ぶしつけ）ながらも明るい少女の声で満ちていたはずの部屋がやけに冷たく、息苦しかつた。

ノラ

「…………あー、手大丈夫か？」

その…………少し、血が出てるみたいだし」

ノラが、ようやくといった様子で口を開く。

言われて見てみると確かにほど強く殴ったためか、返り血だけではなく、拳が傷つき貴方自身の血が垂れ、ぴちやりと地面に滴つた。

ノラ

「ほら、やっぱ怪我してるじゃないか

……薬草あつたろ？　巻いてやるから、手……出せよ」

ノラはこの数日間一緒に暮らす内に覚えた、まだ慣れぬ手つきの治療を申し出る。

彼女に何を聞けばいいかまだ迷っていた貴方は、言われるままに手を出し、彼女の治療に身を任せた。

ノラ

「うあ……どんだけ力入れたんだよ。

握った拳の所、ズル剥けてるじやねえか。

……あの、なんか……本当にごめん、ごめんな……」

『しゅる……しゅる、しゅる』

（包帯を巻く音）

謝る少女の声と、ただ治療をする布の音だけが部屋に広がる。

お互に他に何を言えば、何と言えばいいのか分からぬのだろう。

ノラも貴方も、何も言葉を作れずそのまま時間が過ぎていく。

ノラ

「……うん、終わつた。

教わつた通りだけど、これで大丈夫だよ……な？」

彼女の問いに、貴方は頷いて答えた。

そして、またお互に喋る事が尽きたように沈黙が広がりそうになる。

これはもう自分が聞くしかないのだと決意した貴方は、
【詳しい話を、聞かせてくれるか?】

と、口を開いた。

ノラ

「あ…………うん。

……はっ、へへ。

流石にもう、黙つてられる所は……過ぎちまつた、もんな」

何処か乾いた声で少女が笑う。

怪我をしたのは貴方のはずなのに、その声は何故か、まるでノラ自身が
ずっと傷だらけであつたかのような、そんな思いを抱かせるものであつ
た。

ノラ

「あのクソ野郎……クソ親父（おやじ）はさ、昔はそりや頼れるつて感
じじやなくて気が弱い奴だつたけど……あんな、クズじやなかつたんだ
よ。

オレの頭なんかも撫でてくれて、たまに遊んでもくれて……自信なさそ
うではあつたけど、構つてくれる……うん、オレにとつては……悪い父
親（ちちおや）じやなかつたんだ。

ママ……いや、母親もオレの事よく叱つてたけど、それでも普通の……
普通の母親だと思つてたんだ」

『しゅる……』

(体育座りのよう、膝を抱える音)

ノラ

「でもよ、ある日……親父が働いてた店の商品を積んだ馬車が、襲われたとかでさ。

オレも良く知らねえんだけど、なんか運悪く大口の商売の品だつたとかつて、話でよ。

んで、その損害であつという間に店が傾いたとか何とかで、親父の奴……働き口を無くしてさ」

『しゃら……』

(居心地悪そうに、座る姿勢を変える音)

ノラ

「そつからは、なんか……あつという間でよ。

親父は新しい働き口を探したけど、何処も見つからなくて、オレもマ……母親も一緒に支えようつてんで、頑張ってたつもりなんだけどさ。……へへ、オレその頃は自分のこと”あたし“って言つてたんだぜ？まだ、家族一緒で頑張ろうつて家事とか手伝つてよ……へへ。料理とかも、少しでも時間を親父や母親に作つてやりたくて、やってみたりとかさ！

ハハ、頑張つてたんだ……頑張つたんだけど、……なあ」

ノラ

「……ある日、母親が家から居なくなつたんだよ。

何かあつたのかつて、親父と一緒に探したんだけど見つからなくて、何日待つても帰つてこなくて……。

……そしたらさ、暫くして近所の婆どもがコソコソ話してんのが聞こえてきたんだ。

なんか……仕事を探してゐる時に見つけた別の若い男と、何処かに……消えちまつた、とかでよ。

ハハ……笑えるだろ？ 見捨てたんだよ、オレも親父も……最高のジョークだよな、まつたくさ」

ノラ

「……そつからは、今度は親父の奴が壊れちまつた。

必死にやつてた仕事探しも止めて、朝から晩まで酒を飲んでは暴れるようになりやがつてよ。

……オレも、オレだつてショックだつたけど。でも、このまま親父を放つてもおけねえし。

時間が経てば、親父だつて立ち直ってくれるつて思つて……少ねえ金をやりくりして、どうにか飯とか用意してつて、そうしたんだ。

そう……したんだよ？」

ノラ

「けど、けどよ……何時まで待つても、親父は、立ち直ってくれなくて

……。

うつ……クソツ。

金が無くなつて……どうしようもなくなつて、そんで、親父はオレに当たるようになつて、でも無いものは無いんだからしそうがねえだろ？！だから、そう言つてよく怒鳴りあいするようになつて……どんどん、どうしようもなくなつて」

ノラ

「はつ……ハハ！

そんな時、珍しく出かけた親父がよ……金を、持つて帰つてきやがつたんだ。

”これで、美味しいものを作れ”つてよ！ へへ……オレ、仕事が見つかつたんだつて、無邪気に、喜んで……作つて、さあ……つ。

……そしたら、ぐす……う、作つてる、最中に……突然言うんだぜ？

”お前は明日から、娼館に住むことになるから準備しておけ”なんてよ……ふつ、あはは！」

ノラ

「……何、言われてんだか、分かんなくて……ぐすつ。

オレ、冗談だろつて笑つたら……”どうせお前もいなくなるんだろう？だつたら役に立つていなくなつてくれ！”とか笑つて……笑つて言われて。

……氣付いたら、家を抜け出して……町を一人で歩いてた。

何日かそうしてたけど金もないから飯も食えなくて、腹が減つて……くつ……はは。

そんな時に会つたのが、おっさんだつたんだよ。

あとは全部、おっさんが見たとおりさ……ふつ、はは！
なあ、それだけの話なんだ……笑えるだろ、なあ……笑えるだろ、おっ
さん？

は……はははは！」

全てを語り終えた少女は、止まらない涙を拭う事もなく……ただ笑つて
いる。

ポロポロ、ポロポロと、頬を伝い滑り落ちていく涙の欠片が、少女の苦
しんでいた時間そのものであつたかというように……止め処なく流れ続
ける。

ノラ

「なあ……おっさん？

オレ、何か間違つてたのかなあ……親父が、元に戻るつて……期待しち
や、いけなかつたのかなあ？

それとも、親父の言うとおり……親孝行とでも思つて、売られたりや良
かつたのかなあ？

へへ、へへへ……分かんない。分かんないよお……あたし、もう……何
も分かんないよお……。

ただ、ただ……元気になつて、欲しかつた……欲しかつただけなのに、
それだけだつたのに……う、あ……ああ……うつ、うあああああああ
あつつ！」

《ぎゅうつ》

(強く抱きしめる音)

先ほど起こった事と、溜め込んでいた思いが喋っている内に、限界を迎えたのであろう。

零れながらも、必死に抑えていた涙が、声が、大きく弾けるように流れ出していく。

貴方は、彼女を抱きしめた。

涙と一緒に自分すら流れ出してしまいそうなこの少女を、せめて……抱きとめてやりたいと、そんな思いに動かされるままに。

ノラ

「ぐす、えぐ……うつ、あ……あう、うう……ううううう。
なんでえ……なんでなんだろお……えく。
……うつ、ぐす……ああ、うあ……ああああ……っ」

これは少女……ノラの家庭の問題だ。

本来ならば貴方が介入するような話ではないのかもしれない。

事実、世界中で見れば……娼館が何処にでもあるように、こんな話はよくある話なのだ。

ただ何処にでも転がっている、一つの不幸な世間話に過ぎないのである。

だが、貴方は……彼女に出会つたしまつた。

腕の中に泣きじやくる少女は、確かに貴方の前にいて、貴方の家で料理を作り、掃除をし、……貴方の帰りを待ち、一緒に笑いながら共に暮らしてくれていた少女、その人なのだ。

それを今、良くある話だからなどと言つて、捨て置いて……知つた事ではないと、見捨てていいものなのだろうか？

貴方が、その答えを見つけるべくじつと自分の心の中を見つめていると、泣いて気持ちの整理が少しは済んだのか……何処かすつきりしたような、いや、諦めたような顔でノラが笑つた。

ノラ

「ぐす……ふつ、へへ。何泣いてるんだろ、俺？……へへ。

ごめんなおつさん、オレが転がり込んだばかりに、変な話に巻き込んでしまつてよ。

……ははつ、これ以上、おつさんに迷惑はかけられねえや。

オレ……オレさ、今日でもう……ここ出てくよ！

へへ、娼館つたつて商品である女を無駄に虐待なんてしねえだろ？
そりや、逃げたオレは最初は相応の扱いをされるかもしれないけど……
死ぬ訳じや、ねえと思うから、よ。

……ふふ、ずっといたら、またおつさんの事、巻き込んでしまうから、
さ」

ノラが、笑う。

涙で赤く腫らした目を見せながら、それでも頬を持ち上げ、なんという

事はないと言うように、笑つてみせる。

けれどその瞳は、口調とは裏腹にランプの光の中、不安氣搖れ続けていた。

ノラ

「ふふ……なんだ、あの……ほれ。

おっさん、あの娼館に顔を出してるみたいだしよ！

へへ、オレが……店に、並んだらよ？ 指名つてやつ……してくれよな！

お世話になつた分、いっぱい、いっぱい……サービス、するからさ！

……ひひひつ♪ 色々教わつて、おっさんが良い女だつて、生睡飲み込んで驚くぐらいになつてるかもしけねえしな？

は、はは……♪』

笑う、笑う、ノラが笑う。

涙はもう止まり、明るい声であるはずなのに。

笑いながら、彼女が……泣いている。

『……ぎゅつ！』

(再び、強く抱きしめる音)

ノラ

「おっさん？

な、なんだよ……どうかしたのか？」

どうしようもないと、迷惑をかけられないと……全てを諦めようとしているその姿に、貴方の迷っていた心が一つに定まるのを感じた。

視線を、ちらりと部屋の奥へと向ける。そこには彼女にも触らせないようにしていた次の装備を買う資金にすべく溜め込んでいたアイテムが詰まっている。

時に命の危険にあいながらも、冒険者としてより上を目指す。そのため貯めていたといつて過言ではないモノではある。……あるのだが。

全てを売り払えば、それなりの。”新人の娼婦”を一人買い上げるぐらいには”なる金額になるモノ達である。

一度だけ大きく、貴方は息を吐き出した。

頭の中にあつたこれから先の未来の予定を、全て吐息と共に白紙にしながら、ノラに顔をゆっくりと向ける。

【もうちよつとだけ、この部屋にいてくれ。

……少しの間だけでいい。この件を、自分に預けて欲しいんだ】

と、貴方は優しく彼女に声をかけた。

ノラ

「え……おっさん？ 何言つて……？」

《ぎつ……》

(立ち上がる音)

《こつ、こつ、こつ》

(ゆっくりと歩く音)

【良いから。恩を感じてるなら少しの間だけで良い、信じてくれ】
と、ノラの問いを流しながら貴方は部屋の奥へと向かい、そして何重にも封をしていたソレを……ゆっくりと開ける。

《がちや……がちや、がちや、がちや》

(鍵を幾つも開ける音)

《きいいい……》

(扉が、ゆっくりと開く音)